



富岡自治警察

3. 災 害

台風・地震・干ばつなどの自然の災害は、物質的・精神的破壊をもたらし暴威をたくましくする。その例を、戦後において数時間で大破壊をもたらした大台風にみると、次表のようになる。ほとんど毎年といってよいほど発生し、戦後の窮乏した生活にも台風はやま

ずに襲来しているのである。昭和20.8.25, 20.9.17枕崎台風, 20.10.10阿久根台風, 24.6.21テラ台風, 24.7.30ヘスター台風, 24.8.16~18ジュデイス台風, 25.7.27フェーン台風, 25.9.3ジェーン台風, 25.9.13キジャ台風, 26.7.1ケイト台風, 26.8.19~22マージ台風, 26.10.14~15ルース台風, 27.3.22豪雨, 27.6.23グイナ台風, 28.9.24~25テス台風, 29.8.18グレイ台風, 29.9.7キャシイ台風, 29.9.13ジェーン台風, 29.9.18ローナ, 29.9.26マリー台風, 29.9.30ルイス台風, 30.10.4マージ台風, 30.10.20オパール台風, 31.9.26~27ハリエット台風, 32.9.7ベス台風(33.1.26南海丸沈没), 33.8.25クロシー台風, 33.9.17ヘレン台風, 34.8.8(6号台風), 34.9.26伊勢湾台風, 35.4.20大雨, 35.5.2チリー地震による津波, 35.8.11~12(11号台風), 35.8.24(16号台風), 36年6月末豪雨, 36.9.16第2室戸台風, 36.10.26~27大雨, 38.8.9(9号台風), 39.8.23(14号台風), 39.9.24(20号台風), 40.9.10(23号台風), 40.9.13~17豪雨, 40.9.17(24号台風), 41.8.13~15(豪雨), 41.8.23~24(15号台風), 41.9.9~10(19号台風), 41.9.16~19(21号台風), 41.9.23~25(24号台風)。

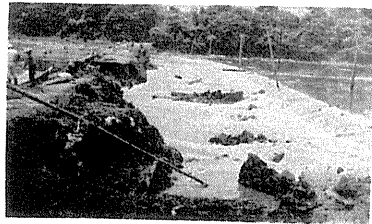
台風に比べ一瞬で大破壊を伴う地震津波も恐怖すべきものであるが、台風のように度々は発生していない。小地震はともかく、津波を生ぜしめた大地震としては、戦後では昭和21.12.21の南海道大地震, 昭和35.5.24のチリー地震に伴う津波ぐらいのものであるが、その被害は甚大となった。

以上によってみると、台風は戦後には昭和25.9.3のジェーン台風, 同25.9.13のキジャ台風, 同36.9.16の第2室戸台風を最大とすべく、地震津波は上記の南海道地震やチリー地震に伴う津波であり、発生年からいえば、多発の年として昭和25年・35年を最とすべく、1地域にのみ大きな災害をもたらしたのものとしては、昭和27.3.22の福井村地域を襲った集中豪雨であろう。

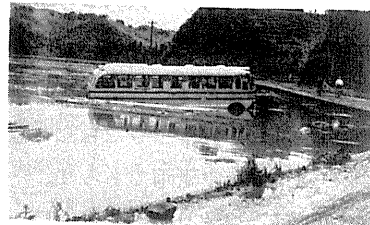
昭和21.12.21の南海道大地震は震源地が近かっただけに被害大きく、見能林村では津乃峰神社事務所および隣接の店舗倒壊、神社職員1人圧死、津波、大手海岸21か所決潰、百トンの貨物船5隻浜・田島上にうちあげられる惨状であり、椿泊では浸水家屋200戸、船舶の大破30隻、椿の庄田横尾まで海水浸入し、橋では死者1、負傷者10、流失家屋50戸(住家非住家合計)、全壊53戸、半壊196戸、床上浸水1,116戸、流失船舶24隻、大破31隻、中破18隻、小破9隻、冠水田7,587畝、冠水畑1,345畝、溺死牛2馬2、堤防決潰20か所、福井では負傷者5、床上浸水127戸、全壊家屋1、半壊7、流失田50町、流失畑10町、流失船舶10隻大破1隻、橋流失5、後戸海岸決潰13か所のごとく、津波による被害が大であるだけに、海岸地域の町村に惨害をもたらした。

昭和24.6.21のテラ台風も、その進路は遠く離れていたが、数日前からの梅雨前線による洪水があっただけに被害は各地におこり、例えば福井では死者1、負傷10、全壊家屋2、半壊4、床上浸水13戸、流失田畑710反歩、埋没620反歩、橋流失7、堤防決潰23ヶ所のごとくであったが、昭和25.9.3のジェーン台風は阿南市域近くを通過しただけに被害も大きく、桑野では床上浸水220戸、橋流失9、冠水田330町歩、流失家屋28戸(住家非住家とも)、堤防決潰4か所、大野では全壊家屋10戸、半壊18戸、床上浸水46戸、中学校2棟半壊、冠水田50町、橋流失4(昭和25.9.13のキジャ台風との合計)、富岡では死者1、流失家屋1、全壊家屋5、半壊18、床上浸水172戸、冠水田200町歩、畑冠水50町歩、岡川堤防決潰2,500m、海岸護岸約1,000m、流失船舶18隻、新野では全壊家屋2戸、流失家屋2戸、半壊14戸、床上浸水90戸、埋没田25町歩、埋没畑5町歩、冠水田12町歩、

橋流失14, 堤防決潰7か所, 小学校半壊1棟の記録がある。



チリ津波(橘町幸田)



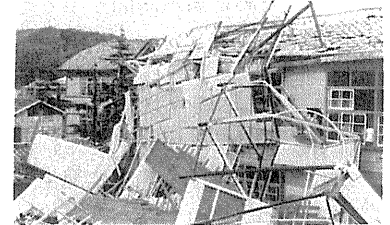
チリ津波(南 鶴)

昭和35.5.24, 午前4時頃チリ一地震によって生じた津波は大太平洋を越えて日本の海岸におしよせ, 紀伊水道に面する海岸特に那賀川河口以南, 蒲生田岬以北の椋泊浦から橘浦にかけて最大の津波が襲来し, 各浦ぞいの低地はほとんど浸水し, 橘浦奥の福井川沿岸(大原では約5mの高さの津波がさかのぼった)は最も広範囲に浸水した。護岸施設の被害も橘浦湾奥部に集中して, 被災構造物のほとんどが, 沖積低地前面の河川堤防であり, 津波が越流して施設の背面をえぐり, 破堤したため, 耕地・家屋・土木施設に多大の被害を及ぼしたのである。この津波は予測し得ないほど突然であっただけにその被害も大きかった。橘町では床上浸水774戸, 流失家屋6戸, 冠水田35町歩, 道路損壊2か所, 堤防決潰2か所, 通信施設の破壊7か所におよぶ, 福井では床上浸水19戸, 流失家屋1戸, 冠水畑80町歩, 堤防決潰5か所, 船舶破損14隻, 椋町では床上浸水19戸, 見能林では床上浸水62戸に及んだ。

昭和36.9.16の第二室戸台風は第一室戸台風(昭和9.9.20夜~21朝)にかけて襲来し, 未曾有の被害を生じ戦前の台風では筆頭とせられている)と同じく本県の日和佐に上陸し, 神戸和田岬に進む進路をとり, 午前11時頃阿南市域も台風の(最大風速27.5m)通過点となったので被害を生じた。すなわち阿南市全域で, 負傷9, (重傷2, 軽傷7)全壊家屋13戸, 半壊家屋85戸, 床上浸水654戸, 床下浸水644戸で, 阿南市域としては本県の他地域に比べると意外に被害少なく死者もなかった。けだし昼間であったこと, 桑野川・福井川などの水位低く, 破堤洪水にいたらなかったからであろう。



台風23号(昭40)床上浸水



同(昭40)倒壊校舎

昭和27.3.22の低気圧による豪雨は, 福井村地区で雷雨を伴う記録的なもので最大160.2mmに達し(21時~22時の1時間)この記録は日本においても驚くべき時間雨量であって, 水害も大きかった。すなわち被害死者6, 負傷者2, 家屋全壊3戸, 半壊18戸, 床上浸水305戸, 橋流失16, 堤防決潰320m, 道路決壊16か所, 田畑流失75町歩, 農作物被害200町歩, 山崩れ3か所に及んだが, 他地域では大雨はなく奇妙な現象を呈した。

昭和34.12.2の低気圧による大雨(12月の雨量としては本県最高記録)も, 橘町で死者1, 機帆船沈没1の犠牲を払っている。

昭和37・38両年度は比較的平穏な年であった。すなわち昭和37年は1回の台風の来襲もなく終り, 38年に1回, いわゆる38.8.9, 第9号台風が発生(豊後水道より大分に上陸し, 玄海灘に去る)したが, その中心が阿南市を遠く離れていたために被害は少なかった。

昭和39年には2回襲来した。第1回は昭和39.8.23, 台風14号(九州枕崎に上陸, 別府湾, 伊予灘を経て, 岡山県を通り能登半島に去る)で, 四国に近接して通過したが, 被害は少なかった。第2回目に襲来した昭和39.9.24台風20号(九州大隅半島に上陸, 四国北西部を通過した。)は, 最大風速49.5mに達し, 雨量よりも風害が大きく, 阿南市にも被害を出した。

昭和40年には2回台風・集中豪雨が直接阿南市を襲い, 大きな被害を与えた。すなわち昭和40.9.10の23号台風は徳島県中部を通過し, 最大瞬間風速67mで, 徳島気象台創立以来の新記録(測器ペンがスケールアウトするくらいであった)をつくったほどであったが, 10日午前8時高知県安芸市に上陸し, 北上東進して12時過ぎには若狭湾にぬけたほどの速度で(時速70

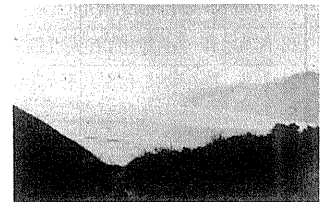
km)、ために暴風時間が短くてすんだので、台風の大きさに比して被害は大きくはならなかった。それでも阿南警察署管内(阿南市・羽ノ浦・那賀川両町)で死者1, 負傷者27, 全壊家屋43, 半壊家屋72, 床上浸水11, 床下浸水52, 冠水田249 ha, 山くずれ1を出している。つづいて昭和40. 9. 13, 日本のはるか南方に発生した台風24号は、日本上空にあった前線をしげきして、13日~17日にいたる5日間連続集中豪雨をもたらし、徳島気象台創立以来の786mmという記録的大雨となるとともに、17日には紀伊半島東海上を北々東に進み志摩半島に上陸した。9月10日の23号台風の直後で、その破壊跡を修築するひまもなかっただけに被害が重なったわけであるが、台風自体は阿南市域を外れており被害も少なく、阿南署管内で床下浸水15, 冠水田54 ha, 冠水田23 ha, 山くずれ2, 道路損傷2, 橋流失1にとどまった。

昭和41年には5回も台風・豪雨など異常発生をみているが、被害は大きくなかった。昭和41. 8. 13~15にわたり県南部に豪雨があったが、海岸地帯が中心であったため増水による下流への影響少なく、ひきつづき昭和41. 8. 23~24の宮崎から長崎に出て朝鮮海峡にぬけた台風15号も、徳島県を遠く離れていたにかかわらず、本県での風雨長時間にわたり強かったが(最大風速17.7 m, 最大瞬間風速28.7 m)、幸い被害は阿南市も少なかった。さらに9月に入って19号・21号・24号と相いつだが、いずれも台風自体が阿南市より離れていただけに被害は少なく、ただこれらの台風のしげきをうけた大雨・長雨での被害にとどまった。すなわち19号台風(9月9日~10日)は豊後水道を北上し佐田岬を経て広島県東部を通過し日本海にぬけたもので、徳島県では最大瞬間風速26.3 mを出し、21号台風(9月16日~19日)は台湾から名瀬に進んで低気圧となって消滅し、徳島県とは直接無関係であったが、この台風の影響をうけて四国沖に停滞していた前線が県下に大雨を長時間(16日午後~19日午前)降らせ、降雨量も富岡で433mmに達したほどであり、24号台風(9月23日~25日)は鹿児島から高知県安芸市に上陸したが、この影響をうけて徳島市西方に低気圧が発達して淡路島に進んだので、阿南市にも影響をうけた程度であった。

以上のように台風の襲来しなかった年もあったが、ほとんどの年に回数
の多少はあったにしても襲来は習慣化して、台風日本の名称にふさわしい
実態である。しかるにその被害は阿南市でもしだいに減少している。けだ
し台風の予知が早くなったことと、郷土の造成の項でも記述したごとく耐
風・耐震・防風・防水の設備がしだいに整えられてきたからで、ここに自然
の災異に対す人間のくふう努力すなわち意志の確立をみるのである。

4. 海 難

阿南市域は紀伊水道に面することとて、漁
港・漁村や港湾が多い。したがって市民で海
に遭難したものも多く、また蒲生田岬沖・伊
島付近の海の最大難所に遭難した船舶漁船は、
外国船を含めて数多い。これらの多くは碇泊
海難救済所や、関係地域の消防団・青年団・



橋 杭 礁

漁民の危険を冒しての救難努力によって、座礁した船体を離礁せしめ、溺
死せんとする遭難者を救助し、大破した船体を苦心して港に曳行し、沈没
せんとする船の排水に努力するなど、救助された場合が多いが、船体はと
もかく、不幸にも貴い生命を犠牲にした場合も少なくない。

阿南市域海面の船の最大の難所は、蒲生田岬と伊島の間であって、ここ
には橋杭礁と称する大小5つの暗礁が横たわり、風浪濃霧のため座礁し、
大破沈没した船舶漁船数多く、徳島県海域では、北の鳴門海峡に対する南
の難所として航海者に恐れられている。

大 平 礁	東西4間	南北8間	海面に出る部分1丈
西 ケ 礁	〃 2間	〃 2間	〃 1丈8尺
小 平 礁	〃 2間半	〃 2間	〃 6尺
片 口 礁	〃 1間半	〃 1間	〃 8尺
暗 礁	〃 8間	〃 10間	〃 干潮時に 少し露出

5. 火 災

台風・地震・洪水などは自然の災害であって、その予防のための堤防構築・護岸工事・耐震耐風家屋の建造などにも限度があろう。しかしこれら自然の災害に対し、火災は人災によるものが多く、ある程度まで防ぎ得られるものである。阿南市のごとき、富岡・橋をはじめ、新野・桑野の商店街や、椿泊・橋・伊島のごとき密集地域なればともかく、多くは数軒が群在する農漁山村地域においては、比較的大災となった例は少ない。

昭和34年以降の火災状況をかかげる。建物の火災も同一場所における類焼は少ない。林野の火災が比較的多いのは阿南市の特色であろう。

阿南市における火災状況

昭和34年度以降(阿南市消防本部調査)

区分 年次	出火件数					計	損害状況			
	建物	林野	船舶	車両	その他		損害額 千円	棟数	建物焼失面積 ㎡	林野焼失面積 a
昭和34	7	6	0	0	0	13	7,053	12	1,541	1,703
35	15	5	0	0	0	20	25,496	33	2,064.1	1,611.3
36	12	10	0	0	0	22	19,539	20	2,195	2,048
37	3	7	0	0	0	10	4,609	7	1,135	1,035
38	13	6	0	0	0	19	29,704	16	1,925	1,182
39	18	4	0	0	0	22	44,240	26	2,239	1,363
40	19	14	2	1	2	38	23,472	19	1,273	182.5

付 椿泊・椿・伊島における火災件数の調査が真島熊次郎氏によってなされている。火災に関する資料は少ないので、全市域とは関係ないが、付録としてかかげる。これによると、明治・大正期にはチョウチンの置き忘れによる失火がめだち、全期間を通して子どもの火遊び、こたつや焚火の不始末、たばこの吸殻による失火、ことに山火事が多いことは注目されよう。

椿・椿泊・伊島の火災

(真島熊次郎氏調査)

椿 泊			椿			
年度	件数	備 考	年度	件数	備 考	
明治34	1	放 火	明治 2	1	幼児2焼死	
38	1		3	2	2件とも山火事	
39	1		8	1	蒲生田部落10戸全焼、八幡祭礼の留守中発生	
45	1		大正 2	1		
大正 2	1		4	1		
4	1	母子3焼死	4	1		
5	1		7	1	山火事	
7	1	山火事	8	2	ともに山火事	
8	1	山火事	14	1	山火事	
9	2	山火事1件	昭和 5	1	山火事	
昭和 5	3		6	1	山火事	
7	1		7	1	舟大工川崎勇他県より来り、橋本屋旅館の借家に居住、永年にわたり家賃を支払わず立退を要求され、橋本屋に放火、主人を殺害した事件	
8	1		10	3		
9	1		12	1	山火事	
11	2		13	2	1件は山火事	
13	1		20	2	1件は山火事	
18	1		山火事	17	1	
20	2		3月14日米機の焼夷弾攻撃により7戸全焼 精神病者の放火1件	22	1	山火事
23	1			23	1	山火事
24	1		山火事	27	2	1件は山火事
25	1			28	1	山火事
28	2			29	1	山火事
29	3		12月28日7戸全焼、4戸半焼、12月26日いわし加工場全焼、消防団員4人負傷	30	1	
33	1		いわし加工場全焼	31	1	
34	1			32	1	
36	2			33	2	1件は山火事
			35	1	焼死1	
			36	3	1件は山際真珠工場より出火、山に延焼、付近住民避難、阿南市域の多くの消防車集合未曾有の防火態勢となる	
					作業場1棟、家屋2棟、山林百ヘクタール焼失	
伊 島						
明治 7	1	5戸全焼				
16	1	1月23日27戸焼失				
昭和 2	1	旧12月30日12戸焼失	39	1	馬詰勅吏の保険金詐欺による自宅放火、懲役4年	
28	1					
33	1	消防団員1名負傷				

阿南市史

船 火 事

年 月 日	事 項
昭和 5 . 11 . 9	椿泊機船底曳網漁船出火, 船尾焼く
6 . 4 . 18	橘町立花丸 (輸送船) 小火
12 . 7 . 4	椿泊阿部金比羅丸出火, 失火と断定せられたが, 昭和13年7月放 火犯人検挙さる
13 . 11 . 10	椿泊商栄丸小火
15 . 8 . 3	椿泊斎藤蛭子丸小火
20 . 7 . 25	大阪高砂丸, 米機の機銃攻撃をうけて出火, ようやく消火する
27 . 10 . 26	高知県幸福丸出火, 消しとむ
29 . 12 . 9	椿泊バッチ漁船常盤丸小火
36 . 8 . 18	〃 〃 住吉丸小火
37 . 8 . 3	椿泊漁協船泊光丸小火